

10

2024

JIA 近畿支部 住宅部会通信



目次

表紙写真

海のギャラリー

例会報告

9/21 JIA 近畿支部住宅部会 9月例会

レポート

9/20～23 建築家のつくる住まい巡回展
2024in 京都
住宅部会賞 2024

Column

Information

24.9.21

JIA 近畿支部住宅部会 9月例会

担当世話人：大江泰輔 津田茂

参加者：正会員 5名、一般 20名 計 25名

市民企画：

和紙職人の考えたこと

「過去から現代、そして未来へ
つなげる空間」

今回の9月例会は、京都文化博物館にて開催されます「建築家のつくる住まい巡回展」市民企画との共同企画として、大変ご活躍の和紙職人のハタノワタル氏をゲストスピーカーに招き「過去から現代、そして未来へつなげる空間」というテーマでお話ししていただきました。



兵庫県の淡路島で生まれ育ち、多摩美術大学で油絵を学んだハタノ氏は、在学中に絵画の支持体として和紙に出会い、国内に多くの産地を持つ和紙の中でも最も強度があり、懐かしい雰囲気のある黒谷和紙に惹かれ、25歳から黒谷和紙職人になる道を歩まれています。伝統工芸である紙漉きと、古くから続く日本の暮らしを活動の根幹としておられて、その美意識は、和紙の歴史と対峙することで育まれたものであり、800年という歴史の上に成り立つ黒谷和紙の紙漉き産業の古と現代の私たちに多様な和紙の可能性をもつ今を繋いでいくことを考えられています。

ハタノ氏のその作風から、和紙が持つ様々な可能性を感じさせられる内容のお話で、改めて建築と和紙の密な関係性を感じさせてくれるものでありました。また、その略歴から、作り手として一から築いてきた苦労など、非常に共感できる部分が多く、あっという間の2時間でした。

尾道の山手で昭和38年に建てられたアパートを改築したホテルLOGでは、「手の力」をとりいれた設計が特徴のスタジオムンバイのビジョイ氏と共に、ホテルの一室の床壁天井や家具を和紙でデザインされたり、建築空間での新しい和紙の提案も生み出しておられる一方で、伝統的な手漉き和紙の次世代への継承もお考えで、衰退していく日本の伝統工芸もある中で、現代における伝統のあり方を探究されておられ、日本の伝統工芸全般に対しても参考になるようなお話でした。

また多くの魅力的な施工事例や和紙の原料となる楮（こうぞ）から手すきの様子など和紙が作られるまでの過程の写真や動画、現在建築中のアトリエの貴重な写真などを通して、一枚一枚の写真を丁寧に説明いただきました。

セミナー中にいただいたひとつひとつの質問にも明るく真摯にこたえられる様子はハタノ氏の人間性も伺え、優しく包まれるような作品と人物像が一致するように思えました。

今回の作品展のテーマとハタノ氏のお話にあった伝統を守る技術の継承と和紙のもつ多様な可能性がとてもしっかりとはまり、和紙と建築、建築と伝統の可能性を改めて考えさせられる貴重なセミナーとなりました。

お忙しい中、多くの人に参加頂き、感謝致します。ありがとうございました。

大江泰輔 津田茂



レポート

建築家のつくる住まい巡回展

2024in 京都

住宅部会賞 2024

2024年9/20~9/23開催の作品展及び住宅部会賞は終了しました。近畿支部の地域会を巡回する作品展であり、今年は京都で行い、京都地域会の参加を呼びかけました。

会場の京都府京都文化博物館は地元の方が館内のイベントに来られたり、観光客が多く、延べ1300人を超える方々にお越しいただき、連日賑わいました。

住宅という身近な話題に対する関心が高く、長時間熱心に見られた方、アンケートに細かく感想を書かれた方、展示台に置いていた建築家のパンフレットを持ち帰る方など嬉しい光景が見られました。

9/22開催の住宅部会賞は、審査員として、彦根アンドレア氏、高野洋平氏にお越しいただき審査の結果、

住宅部会賞として、木村吉成・松本尚子、岡田良子、奥和田健、斉藤智士、榊原節子、西濱浩次が選出されました。

多様な建築、主旨の作品が選ばれ、今年の住宅部会のセレクションとして成功しました。

両企画とも、建築家の社会への発信と会員の自己研鑽の場としての位置づけです。

この委員会は次期委員長として大江泰輔さんに繋ぎ、来年も続けていきます。引き続きご参加よろしく申し上げます。

作品展委員長 井上久実



Column

「海のギャラリー」

設計:林雅子

暑さが落ち着いた秋の海は、釣り人にとって多魚種が狙えるいい季節です。毎年この季節になると四国の西南まで足を伸ばします。関西から車で6時間かけて足摺岬などに行きますが、釣りのためであってその他のことは忘れていたつもりです。しかし、建築は行く先々にあるのです。名建築の存在が気になり、つい旅程に組み込まれてしまいます。

高知県土佐清水市に、毎年スルーしていた建築 “海のギャラリー” を訪れました。

1967年にオープンした林雅子氏設計、土佐清水出身の洋画家、黒原和夫氏の個人コレクションである貝類を展示している小さなギャラリーです。二枚貝から着想したコンクリート（屋根はt80mm）の折板による明瞭な構成で、展示空間から二枚貝の頂部で開いたトップライトの光を見ると、海中にいるような心地になります。地上2階建ての2階にあるガラス製の展示ケースをトップライトの光が通過し、1階の展示空間で揺らめいている中、2階展示ケースの貝殻を下から見上げる体験は、土佐の海を建築空間から感じることができます。屋根、壁である折板の構造体は光を受けて、空間に波のようなリズムをつくり、各展示も折れた壁面に順序良く並んでいます。構造と空間と展示計画が一体となっています。

2000年代初頭には老朽化した建物を保存再生のため改修し、現在も四国の西南端にある名建築です。また来年も釣りのついでにあの空間を体験すること想像しています。

松本和也



